



「第二次日本経穴委員会」便り

～第43回 臂臑と臑会～

第二次日本経穴委員会・作業部会委員 うらやまひさつぐ
浦山久嗣

WHOつくば公式会議

臂臑と臑会は同じ高さに位置しているという認識が一般的と思われる。

2006年のWHOつくば公式会議で採択された原案では、臂臑（LI14）は、「上腕外側、三角筋の前縁、曲池（LI11）の上方7寸。注：臑会（TE13）と同じ高さに並ぶ」であり、臑会（TE13）は「上腕後面、三角筋の後下縁、肩峰角の下方3寸」であった。

学校協会による『経絡経穴概論』も、「臂臑：肩髃穴から曲池穴に向かい下3寸、三角筋の前縁に取る」「臑会：肩髃穴から肘頭に向かい下3寸に取る」とあり、上腕の長さを10寸と考えると、WHOの臂臑と『経絡経穴概論』のそれとは測り始めの位置が違うくらいのもので、一見、何の問題もなさそうに見えるが、実はそう簡単でもない。

上腕の骨度

WHO標準経穴には取穴のためのガイドラインも添付されているが、そこに記載される上腕部の骨度基準は「腋窩横紋前面または後面から肘窩まで：9寸」しかなく、上腕全体の骨度は決められていないため、肩関節を起点としては

上腕部の経穴の距離を確定できないという問題が生じてしまっていたのである。

『靈枢』骨度篇には、「肩より肘に至るは、長さ一尺七」とあるが、この骨度を利用する場合は、肩関節を90°外転（水平拳上）した状態での肩甲骨内側縁から肘頭までの距離を意味しているため、解剖学的な姿位を基準とするWHOの骨度法には馴染まず、採用されなかったという経緯もある。

また、慣用的に使用されてきた上腕を10寸とする説も、歴史的な根拠が希薄な上に、前述した腋窩横紋端までを9寸とする説を前提にすると、腋下横紋端から肩峰端までの距離が1寸しかないことになるため、これも採用できないのである。

歴代古典の臑会

そもそも『鍼灸甲乙経』卷三には、「臂臑は肘の上七寸、醜肉の端に在り。手陽明の絡の会（手陽明及び臂 第二十七）」「臑会は……臂の前廉、肩頭を去ること三寸に在り。手陽明の絡。（肩 第十三）」とあり、「醜肉の端」とは解剖学上の三角筋停止部を意味する。

ここで注目すべきは、臑会の「臂の前廉（上腕前面）」という言葉であろう。しかも、手少

陽経ではなく手陽明の絡で、上腕部ではなく肩関節部に所属しているのである。つまり、元来の膈会は三焦経ではなく大腸経に所属し、肩峰端から前方に向かって3寸下方にあることになり、三角筋の前下縁で上腕二頭筋短頭腱付近に位置することになる。

所属経絡については、『千金方 (630?)』『千金翼方 (680?)』は肺経に配当し、『素問』氣府論の王冰注 (762) に「手陽明・少陽二絡の気の会」という。また、『銅人腧穴鍼灸図経 (1026)』巻上では三焦経 (巻下では「手陽明の絡」) に所属させ、『十四経發揮 (1431)』以後は三焦経でほぼ安定している。

歴代の穴位表現については、中国も日本も基本的には『鍼灸甲乙経』と変わらないが、『鍼灸抜粹大成 (1699)』には、「膈会は……肩の端を下ること三寸に点ず、即ち肩髃の下三寸、天井を的 (めあて) にして点ず。……これより以下関衝まで手の少陽三焦経なり」とあり、あるいは『医宗金鑑 (1742)』刺灸心法要訣・三焦経穴歌の注に、「消灤より膈外 (上腕外側) を上行し、肩端を去ること三寸、宛宛たる中、膈会穴なり」とあることなどは、例外中の例外である。

近代の経穴学においては、日中ともに、これら例外的な文献の影響を受けて変化し、今日に至っている。

膈会の主治証

ちなみに、『鍼灸甲乙経』の膈会の主治には、「腠理氣 (巻十・水漿消えずして飲を発す 第六)」と「瘰 (巻十二・氣に結する所有りて瘰癧^{りゅう}を発す 第九)」しかなく、後代に必ず登場する「臂痛みて拳ぐる能はず (『銅人腧穴鍼灸図経』)」などはない。「腠理氣」は皮下の浮腫、「瘰」は頸部リンパ節の腫瘤であろうから、2

つの膈会に、これらのエビデンスを競わせてみれば、説得力のある解決が図れるのではないだろうか。

WHO標準経穴出版記念報告会

本年1月29日～31日にフィリピンのマニラで、WHO標準経穴の編集出版を目的とした特別会議が開催されたが、経穴部位表記の最終確認の一環として、この臂膈と膈会の問題も討議された。

各国の代表者の多くは、この数年来定期的に1つのテーブルを囲んで濃密な話し合いを継続してきた方々であった。一丸となってこの難題の解決に向けて知恵を絞り合い、やっとのことで、採択された原文の雰囲気壊さない程度の表現に漕ぎ着けたようである。

来る5月30日～6月1日に国立京都国際会館において第57回(社)全日本鍼灸学会学術大会(京都大会)が開催される。5月30日の午後、WHO/WPRO事務局長の尾身茂氏やプロジェクトリーダーである伝統医学諮問官の崔昇勲氏をお招きして出版記念会及び報告会を予定しているが、この報告会に間に合うように出版刊行も予定されており、併せて医道の日本社からの日本語版も同時刊行できるように、現在(3月末)も交渉中である。

ご興味のある方は是非、京都に足を運んで頂いて、臂膈と膈会の表現がどのようになっているか、さらには、これまでにこの「便り」のコーナーで取り上げてきた経穴の諸問題がどのような決着を見たのか、ご確認頂ければ幸甚である。

(〒980-0845 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉33-1
赤門鍼灸柔整専門学校 東洋療法教育専攻科)